

【vol.42】とある“使える図”について (サークル・オブ・フィフスの基本)

こんにちは、大沼です。

今回は、“使える図”と言うことで、音楽理論を考えたり、楽曲の分析をする時に便利な、とある図を紹介します。

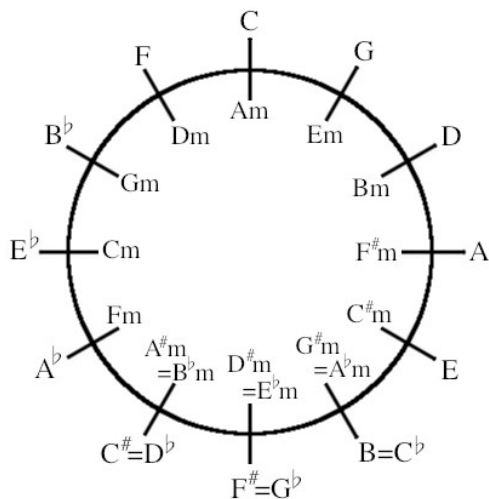
すでに知っている人もいるかと思いますが、その図とは『サークル・オブ・フィフス(circle of 5th)』と言うものです。

日本語では『五度圏(ごどけん)』などと呼ばれますね。

他には「サークル～」ではなく「サイクル・オブ・フィフス」と言われる事もあるんですが、呼び方はどれでも構いません。

どこの誰が考えたものなのかはわかりませんが、知っているると超便利な図ですので、この機会に、使い方を覚えてしまいましょう。

では、早速ですがその図を見てみましょう。こんな感じのものです。

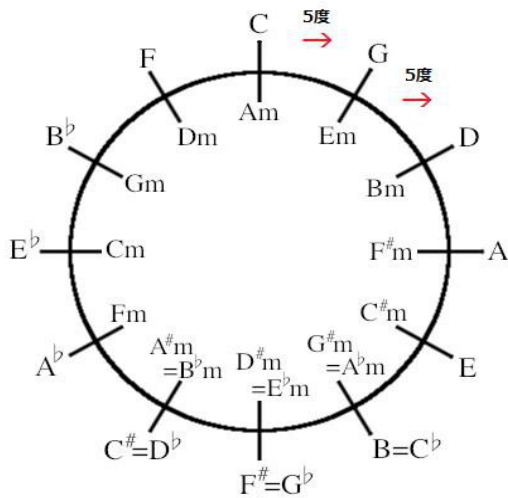


グーグルなどで検索すると、色々なタイプの画像が大量に出てきますが、どれも概要は同じです。

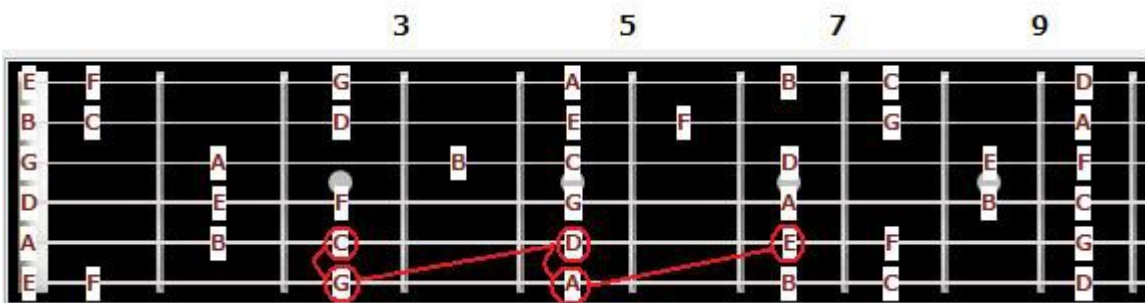
そしてさっそくですが、このテキストでも、グーグルからひっぱって来た画像を印刷するのも、紙に書き写したのも良いので、どうかして手元において置きましょう。
 (※他者の作ったものには著作権が発生するので、取り扱いには気を付けましょう)

そらで理論がわかるようになるまでは、常にこの図を見ながら考えていた方が、理解、分析のスピードが桁違いに速いです。(※僕も昔は常に見てました)

さて、サークル・オブ・フィフス(以下、SoFと略します)の名の通り、時計回りに見ると、音名が5度(P5th)ずつ進んでいますね。

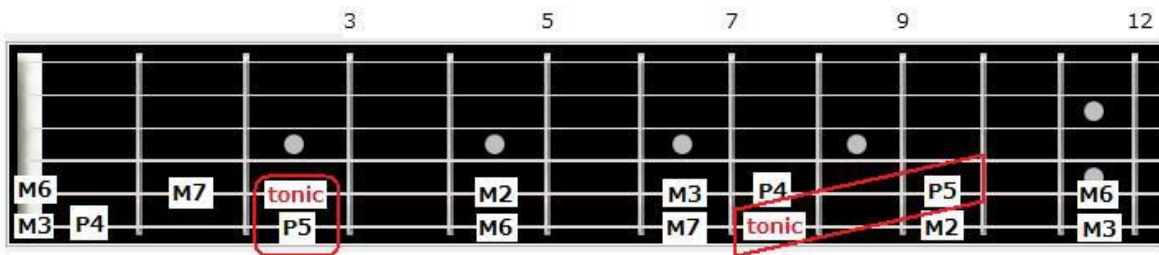


音名だけでは5度の間隔がイメージしにくい場合は、ギターの指板上でこのように見てみましょう。



C音から見て5度はG音、G音から見て5度はD音、D音から見て5度はA音・・・と、ループしています。

vol.33 で覚えた、このインターバルの位置関係を思い出してください。



5弦に基準音を見る時は、真上の6弦にP5thが、
 6弦に基準音を見る時は、2フレット先の5弦にP5thがありますね。
 (※これはパワーコードを思い出してもらえればわかりやすいでしょう)

これらの各音の関係性を見やすく纏めてあるのがSoFの図です。

なのでまず第一のポイントは、

・SoFは時計回り(右回り)に進むと、5度(P5th)ずつ音が進行している

ということですね。

次に、反時計回り(左回り)の方向に見てみましょう。

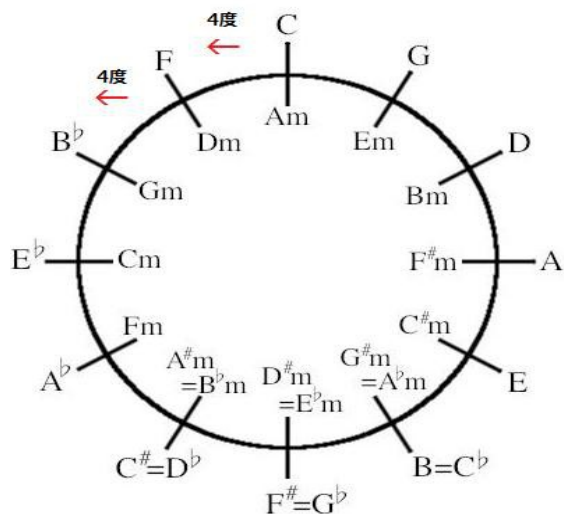
C音を基準に見るとしたら、左隣はF音ですね。

このC音を1度として見るならば、F音は4度(P4h)にあたります。

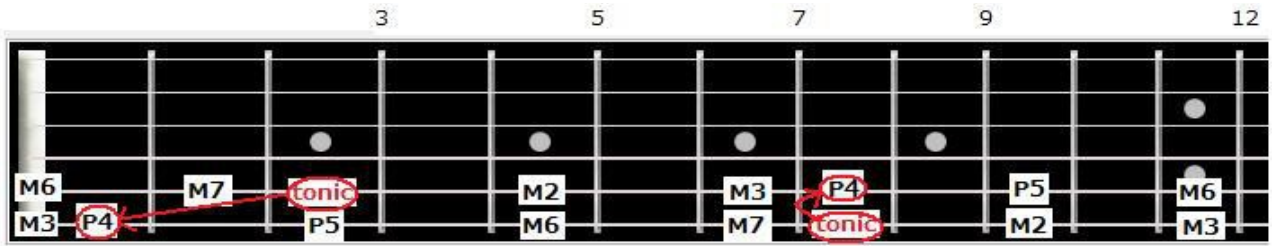
と、言うことで、第二のポイントは、

・SoFを反時計回り(左回り)に進むと、4度(P4th)ずつ音が進行している

になります。



この4度の関係も、指板上で確認しておきましょう。



5度の時と同じように、SoFの音名と指板上の音名がリンクしているはずですが。

さて、右回りが5度進行、左回りが4度進行と、SoFの図ではこれが基本なんですが、他にも色々な見方が出来たりします。

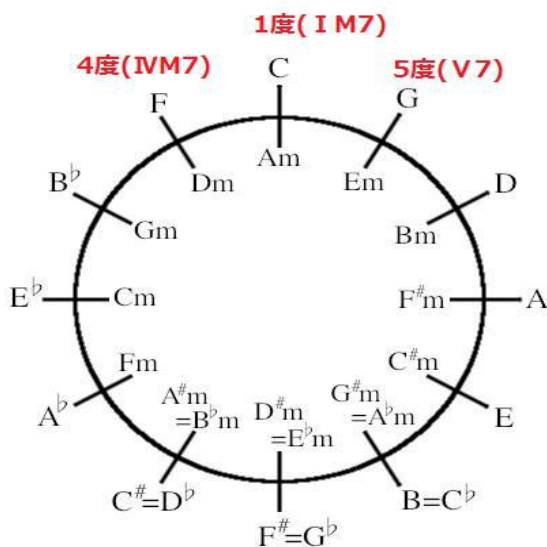
まず、つい最近学んだ、終止形のSD→D→Tの進行がありますね？

その進行はメジャーキーの主要和音では、IV→V→Iの進行でした。

Cキーの場合はF→G→C(FM7→G7→CM7)ですね。

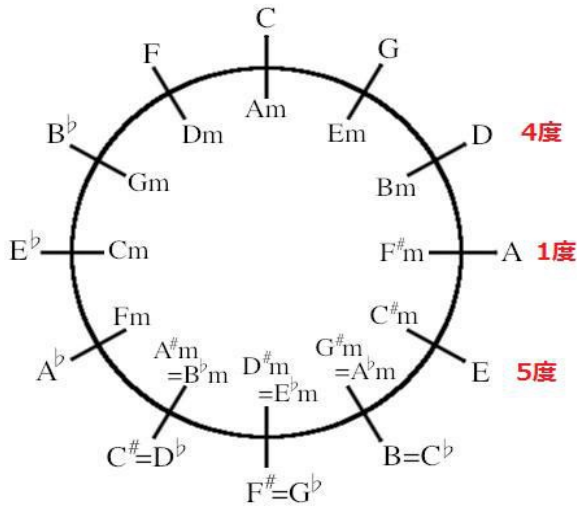
インターバルの数字だけで考えると、実際のコード進行を導くのに時間が掛かりそうですが、SoFの図を見ると、これが一目でわかったりします。

例えば今回の例で言うと、C音を1度(IM7)として見た時、左隣のFが4度(IVM7)、右隣のGが5度(V7)とそれぞれのダイアトニックコードのルート音を表しています。

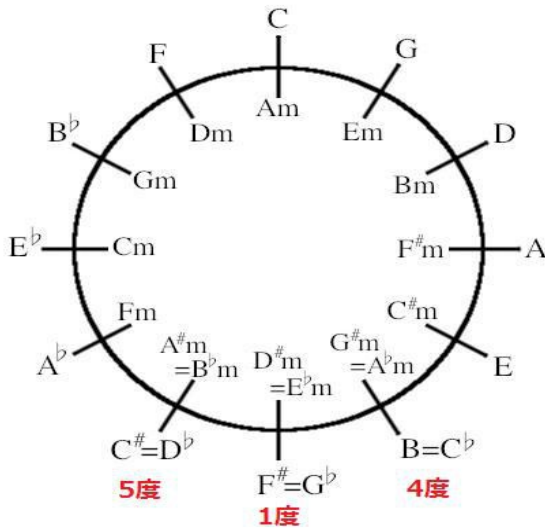


今はC音を基準に見ていますが、この位置関係は、どの音を基準に見ても同じ様になっています。

例えば、A音を基準に見るならば、左隣のD音が4度、右隣のE音が5度になります。



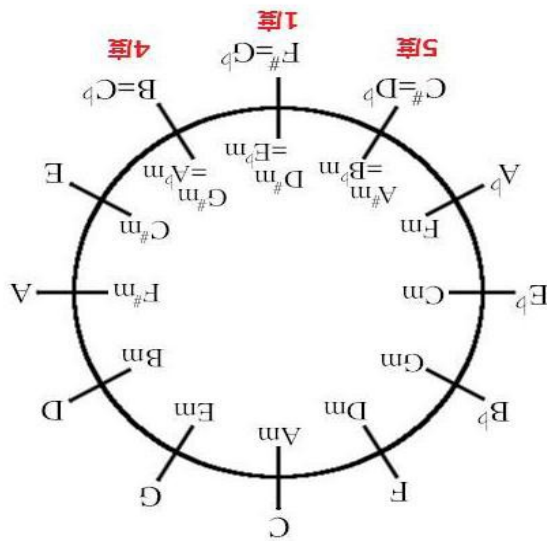
他にも、一番下のF#を1度とするならば、B音が4度、C#音が5度です。



円状の図で「右隣、左隣」と説明すると、少しわかりにくいかも知れませんが、要するに基準に見たい音名を、一番上(今C音がある位置)に、ぐるっと持ってきてしまえば良い、ということです。

例えばF#を基準にしたいなら、この図を逆さに見たら良いわけですね。

こんな感じで。



とまあ、文字ごと反転させると非常に見にくいですが、概要としてはこういう事です。

このように、

IV→V→Iに対応する、ダイアトニックコードのルート音も
パッと見ることが出来る、

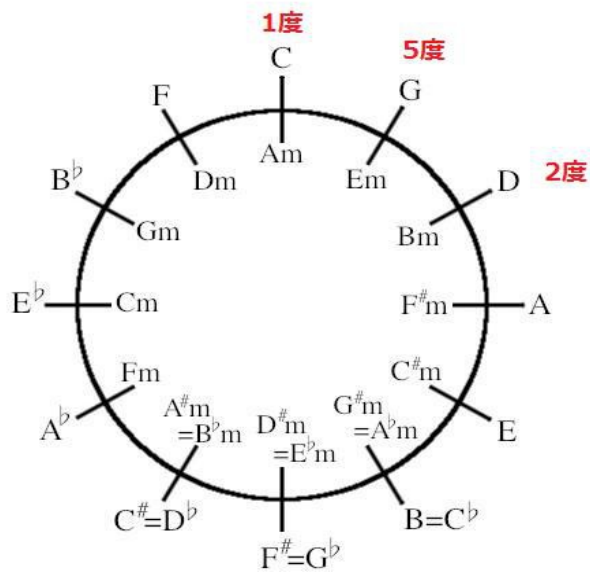
と。

最後にもう1つ、ダイアトニックコードの重要な終止形に、
II→V→I というものがありましたね。

これも SoF の図では、一目で見ることが出来たりします。

例えば、いつもの様に C キーで説明すると、
II→V→I は Dm→G→C(Dm7→G7→CM7)となりますね。

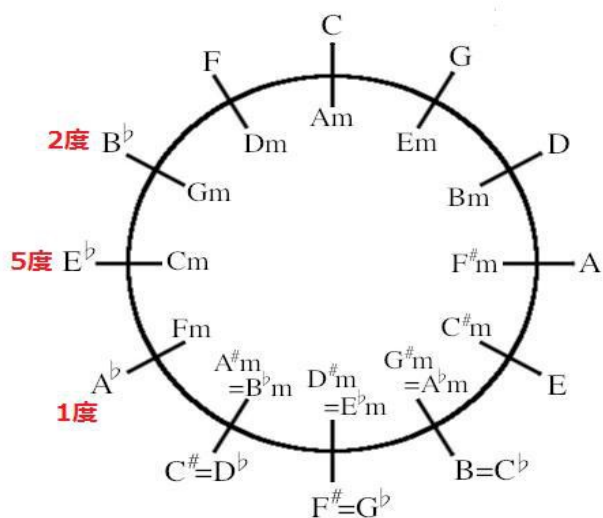
これを図の上では、この位置関係で見ることが出来るのです。



このように、ダイアトニックの各インターバルのコードに対応するルートが一目でわかります。

II - V - I については、もう1つ例を挙げてみましょうか。

例えば A^bキーの II → V → I だとしたら、このように見ることが出来ますね。



とまあ、こんな感じです。

この辺り、まだ理論になれていない内は、重宝するでしょう。

と、言う事で、今回は以上になります。

実は SoF の図には、他にも使い道が色々あるのですが、それはその時が来たら再度解説していきますので。

今回学んだことは、

- ・時計回り(右回り)が5度の間隔
- ・反時計回り(左回り)が4度の間隔
- ・重要な終止形である、 $IV \rightarrow V \rightarrow I$ と $II \rightarrow V \rightarrow I$ の見方

この3つでしたね。

SoF の図を見ながら、今まで弾いてきた曲、これから弾く曲を分析してみると、きっと良い助けになるでしょう。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼